278
98

大正十五年二月

長崎圖書館報

第一號

長崎縣立長崎圖書館

始

目次

一、圖書館を普及擴張するの必要なる所以を論す……永山時英…一
二、圖書館の窓より見たる長崎近時の讀書界……增田廉吉…一〇
三、大正十四年十月十一月の二ヶ月間に最多く讀まれたる圖書……一三
四、閲覽人員表（大正十四年中）……一五
五、閲覽人員職業別表（大正十四年中）……一六
六、閲覽圖書冊數表……一七
七、新著圖書目錄 自大正十四年四月 至仝年九月……一九

大正 15. 3. 2. 寄贈

小倉寄贈本

278-98

圖書館を普及擴張するの必要なる所以を論す

永山時英

(一) 學校と圖書館は國民教育の兩翼なり

學校は知識の所在を知らしめ、且つ之を獲得するに必要なる技能と方法とを授くる所であつて、知識其物を授くる所では無い。知識其物は卒業後の自修自學に待つの外はない。故に國家がその向上發展を望む以上は國民に向つて學校教育を受くるの義務を强要するの必要あるは勿論であるが、其の教育の効果を收めんとするには、國民に讀書を奬勵し、各自の一生涯に渉りて自修自學を繼續せしむるの必要がある。是れ圖書館を普及擴張するの必要ある所以である。

從來は餘りに學校教育を偏重した。總ての知識は學校で教授し得るものとのみ考へられた。夫れ故に兒童の頭に研究の素地を作らうと云ふよりは、寧ろ之に一つでも多くの知識を注入しようと考へられた。今日でも尙ほ少數者の間にはこんな考を持つて居る人がある。是れ教科書萬能主義が謳歌された所以で、學校教育と云へば教科書の暗誦の外にないと思はるゝやうになつた所以であつた。かくして圖書は兒童の大多數からは一種の責道具のやうに思はれ、一般からも圖書は學校在學中にのみ必要なものと考へらるゝやうになつた。

歐米の先進國でも學校のみが偏重せられ、教科書萬能主義が謳歌されたのは久しい間のことであつた。併し五六

十年前から圖書館運動が起り、教室文庫が送られて、教師が之を利用して自學の風を奬勵し、大にその効を收めてから、教授法が一變した。學校で總ての知識を授け得るものと考へたのは大いな誤謬であつたといふことが一般に承認せられ、學校は單に研究の基礎を作る所であるといふことが動かすべからざる眞理として認めらるゝやうになつた。それで今日では小學校教員の主たる任務は兒童をして地理歴史博物理化其他の教科書に精通せしむることでなくして、兒童に讀書力と讀書趣味とを養成せしめ、之に圖書の利用法を授け、且つ多くの良書を紹介し、卒業の後公共圖書館を利用して自修自學せしめ、各自の一生涯を通じて絶にず向上せしめんことを期するにありと一般に認めらるゝやうになつた。

右の如く學校の教授法が一變せられた結果、各學校では附屬圖書館が出來て、兒童をして圖書に親ましめ、圖書によつて種々の事を自ら研究せしむることが大に流行して來た。そして學校以外にも到る所に圖書館が設けられ、各圖書館では閲覧者に出來得る限りの便宜を與へ、あらゆる方法を設けて閲覧者を圖書館に引付くることを努め、又簡易な館外貸出しの法を設けて、何人でも居ながら容易に望む所の本を手に入れることが出來るやうになつたので、國民の讀書慾はすばらしく旺盛になつて來た。地方の村落でさへ居住民の總人口の半數以上が圖書館から館外貸出の特許を受けて盛に讀んで居る實例さへある。

右の如き次第であるからして、歐米の先進國では、國民教育は教會を底邊とし、學校と圖書館とを他の二邊とする二等邊三角形を畫くにあらざれば、その目的を達すべきものでなく、學校と圖書館とは國民教育の兩翼であつてその一を缺けば國民性の向上といふことは決して期待し得べきものでないといふことが一般に認められて居る。夫故に圖書館に對する彼等の熱心の度は學彼に對すると何等異る所がないのである。

我國でも學校教育者の間に近比は自學といふことが大に唱道せらるゝやうになり、教科書萬能主義が段々下火になつて來た。之は大に喜ぶべきことである。併し學校附屬圖書館が盛にならなければ此主張を徹底せしむることは不可能である。そして公共圖書館が普及せざれば、學校で折角養成した自學の學風もその効果を收むることが至難である。それで我國の學校教育界でも圖書館の必要といふことは追々痛切に感ずするやうになるに相違ない。若しそうでないとすれば學校教育者は眞に國民教育の重任を双肩に負ふて立つものとは云へない。

(二) 圖書館の普及が特に今日必要なる所以

圖書館は如何なる時代にも必要である。去ながら吾々は今日の我國の現狀に於て特にその必要を感ずるものである。

昔の如く隨意就學の時代と、今日の如く義務就學の時とは學校兒童の素質に大なる差異があるといふ事實が特に今日圖書館の必要がある第一の原因である。

昔の學校私塾若くは寺小屋の兒童はその父兄が是非教育を受けさせたいと思つたものか、又は兒童自らか進んで學ばんと志したもののみであつた。少くとも遺傳的に向上の精神あるものゝみであつた。そして彼等は卒業證書を最終の目的として就學したのではなかつた。彼等の目的は實力の養成であつた。それで學校を出でゝ後も或程度までは自修自學を勉めたので、教授法は不完全であつたけれども皆相當の成績を收むることが出來た。

今の就學兒童は本人は勿論父兄に於ても何等向上の精神あるなく、只强要せらるゝが爲めに已を得ず就學するものが大多數を占めて居る。彼等の最後の目的は六年の義務を果すにある。少くとも一枚の卒業證書を得るにある。自己の修養とか實力とか云ふことはその目的でないものが多い。夫故に立派な校舍内で、立派な先生から、巧妙な教授法で六年間の教育を受けた兒童も、上級學校に進まないものは、學校卒業と同時に全然書籍と絶緣し、自修自學なぎいふ考は藥にしたくても持合せのないものが多い。こんな有樣であるから卒業後は一寸も進歩を認むることが出來ぬばかりでなく、教はつた所の知識も年一年に忘却し、壯丁檢査の頃になれば無教育者と何等異る所なきものが多々ある。

事情右の如くであるからして、今日の急務は在學中には教育者が大に力を讀書趣味の養成に用ゐ、之に圖書の利用法を授け、多くの良書を紹介すると仝時に、到る所に圖書館を普及し、あらゆる方法を盡して成るべく多くの人を圖書館に引付けることを勉め、來館者に對しては成るべく多くの利便と興味とを與へ、讀書趣味の養成に力を用ふるにある。然らざれば到底國民教育の目的を達することは出來ぬ。昔と仝樣に考へて學校で教育をして置きさへすれば、自然各自が自修自學して一生涯の内には多少の向上をするであらうと思つては飛でもない間違である。一歩進んで圖書館は必要であると考へても、圖書館さへ作つて、圖書さへ備へて置いたならば、自然讀みに來るであらう位に思つて居ても、今日の現狀ではだめである。圖書館には適當な人材を得て、圖書館の方から進んで讀書を奬勵し、之を誘引するでなければその目的を達することは出來ぬ。

次に今日特に圖書館の必要な理由は政治上の一大變化があつたといふことである。

昔の哲人政治の時代では、國民全體の教養の良否は國家の盛衰には餘り多くの關係がなかつた。民をして從はしむべし、知らしむべからずといふやうな方針で政治が行はれた時代には、國民の智育といふやうなことは寧ろ有害であつたかも知れぬ。少數の人を善く教育してその内に一二の雋傑が出來ればそれで結構であつた。こんな時代には圖書館の普及なぎいふことは決して必要でなかつた。

併し立憲政治の今日に於ては、國民の教養如何は直に國家の隆替に關係する。それでも國民の或一部分が國政に參與する間は下層民衆の教育といふことは餘り大切でなかつたが、普選實施の曉には國民の教養は國家の盛衰に至大の關係がある。民衆が愚であつたならば、民衆の輿論は常に煽動者の詭辯によつて動かされ、穩健なる正論はその勢力を失ふて、國家は遂に自滅するの外はないことになる。

今日我日本の隆運を呪ひ、その滅亡を企畫しつゝあるものは決して彼の猶太人の秘密結社のみでない。日本の產業を衰頽せしめ、乃至は日本國民の思想を攪亂せんが爲めに外國から巨額の金品が年々我國に輸入されつゝあることは殆ど公然の秘密である。又よしんば外國の金とは關係なくとも、心にもなき言行を弄して民心に迎合し、民衆の愚昧を奇貨として煽動を事とし、以て私利を營むに汲々たるものも亦決して少くない。是時に當つて民衆に教養なく、從つて善惡利害を靜に批判するの力がなかつたならば、國家は遂に自滅するの外はないことになる。

又世界の大勢から考へても國際關係の非常にデリケートになつた今日に於ては特に圖書館普及の必要を感ずるのである。

世界の一等國といはるゝ國々は我日本を除けば外は皆八年乃至十二年の義務教育を國民に强要して居る。そして

彼等の國々では總ての文章は僅に二十六文字で容易に之を綴ることが出來る。從つてその教育の難易は我國と歳を仝ふして語るべからざるは勿論である。夫故に彼の國々に於ける義務教育修了者の學力が我國のそれに比して遙に優良であるべきは言を待たぬ所である。それにも拘はらず、彼の國々では學校は知識の所在と之を求むる方法及技能とを授くる所であることを明に認識し、圖書館を天下に普及し、學校と圖書館とは手を携へて國民の讀書趣味の向上に努力し、國民教育を各自の一生涯に延長せんことを努めて居る。

之に反して我國の文字教育は誠に困難である。最上級の學校を卒業したものでさへ、尙ほ文字の解釋に困るといふ有樣である。此點から見れば、我國の義務教育年限は歐米先進國のそれよりも遙に長くなくては仝一の効果を收むることは出來ぬ筈である。然るに我國の義務教育年限は英國のそれの半分、卽六ケ年である。それで以て國民教育の目的を達せんとするには、卒業後の自修自學を大に奬勵することにでもせなければ學校教育は全くの徒勞に歸する惧がある。然るにも拘はらず、我國には義務教育修了者の自修自學機關として何が設けてあるか。補習學校などが設けられてある所もあるけれども、之に收容する人員は誠に少數であつて、その成績も思はしく無いことは一般の輿論である。

かゝる有樣で我國が一等國の位地を永遠に維持し得るものといふならば、國民教育の良否は國家の隆替に何等關係ないといふ結論にならねばならぬ。誠に心細き極みである。何はおいても圖書館の普及發達を圖らねばならぬと吾々が絶叫する所以のものは斯る事情があるからである。

(三) 日本人は果して讀書慾なき民族なるか

圖書館普及の必要を絶叫すれば、吾々が常に聞く所の返事は、「歐米人は讀書趣味の多い民族であるから、圖書館の効果も定めて多いであらうが、日本人の如く讀書慾がなくては豫期の効果を收むることは出來まい、今日の如く財政窮乏の時、無理算段をしてまで作る程のものでもあるまい。」といふ云ひ草である。果して日本人は讀書慾の無い民族であらうか。

今日の現狀から見れば日本人の讀書慾は無論歐米人に遙に及ばない。併し日本人に知識慾の旺盛なことは和蘭人などが早くから世界に紹介した所であつた。吾々は先輩が苦心をして書籍を求めて之を耽讀した實例も澤山知つて居る。吾々は決して日本人は讀書慾に乏しき民族とは思はない。此等の議論は畢竟するに歐米の先進國が如何に讀書趣味の養成に努力しつゝあるかを知らぬに基因するものと信ずる。

圖書館の最も盛で、讀書慾の最も旺盛な北米合衆國に於てさへ、公共圖書館運動の起つたのは五十年餘にしかならぬ。そしてその始のには無用のもの、否寧ろ有害なものといふ批難さへあつたので、圖書館從業者は非常に惡戰苦鬪した。併し眞理は最後の勝利者であつて、遂に學校も社會もその必要を認むるやうになつた。併し學校と圖書館とが相協力して立派な成績を收め、圖書館が國民教育の必要機關と認めらるゝやうになつたのは、まだ二十餘年にしかならぬ事柄である。そこになるまでには圖書館と學校とが國民の讀書趣味の養成に努力した苦心といふものは決して並大抵のことではなかつた。そして今でも大に之を努めて居る。

米國の小學校の教育方針が讀書力と讀書趣味の養成に大に力を用ゐて居るといふことは第一節に述べた通りであるが、今では在學八年間を通じて圖書館科といふ時間を毎週一時間づゝ課して居る州は珍らしくない。中等學校から大學に至るまで圖書館學が課せられてある。教員檢定試驗にも圖書館學が加へられて居る州が澤山ある。之は上級學校に於て圖書館學を授けなければ、その卒業生が下級學校に教鞭をとる時、生徒の讀書を指導することが出來ぬ、小學校で圖書館科を授けねば社會に出てから公共圖書館を利用して自修自學することが出來ぬからといふ爲である。

米國殊に西部米國の小學校では、圖書館科の時間外でも、授業時間の大部分を兒童の自習に費し、教員は先づ兒童に或る一定の問題と參考書名とを示して自習せしめ、自習の了るを待つて問を發して兒童に正確な知識を與ふることを以て唯一の教授法として居る學校さへある。

又教師は生徒の讀書趣味を唆る爲めに、面白くて有益な文學書類を多く生徒に紹介することを怠らない。そして公共圖書館は多くこの種の本を備付けて居る。公共圖書館の藏書の八割は小說本で占めて居た時代さへあつた。讀書と云へば必ず堅い眞面目なものでなければ良くないといふやうなことは思はれて居ない。國民の讀書趣味を唆るには娛樂的の本も已を得ぬとされて居る。その結果米國の兒童は圖書館を活動寫眞館よりも面白い所と考ふるやうになつた。かくして本に親しむやうに教養された國民が自然一生涯を通して讀書慾が多いのは自然の結果である。

米國では圖書館運動は既に第二期に入り、趣味本位、娛樂本位から實用本位に進んで來た。或圖書館では小說本を借りに行くと、別に一冊の有益な本を貸與へて、どうぞ仝時に之も讀んで下さいと賴む。之を two book system と稱へて段々と成功しつゝあるといふことである。

米國人が國民の讀書趣味養成に努力することは右の通りである。彼等に讀書趣味の多いのは自然の結果と謂はねばならぬ。然るに我日本人は未だ嘗て國民の讀書趣味養成に努力したことは無くして右に述べたやうなことを考へて居る。誠に思はざるの甚しきものと謂はねばならぬ。

此文を草し了るの時、余は鹿兒島縣立鹿兒島圖書館が二十二萬六千圓を投じて大正十五年度に圖書館の改善を行ことになつたと云ふことと、千葉縣が二十五萬圓を投じて新に圖書館を設くることになつたと云ふことの報知に接した。鹿兒島縣は鹿兒島縣商品陳列所を他に移し、その前庭に二十二萬餘圓を投じて新に縣立圖書館を建て、元の商品陳列所たりし興業館てふ堂々たる石造二階建の一大家屋は圖書館附屬の博物館にするといふことであるから。定めて立派な圖書館が出來ることであらう。千葉縣は二十五萬圓を投じて圖書館を新設すると仝時に、千葉縣圖書館協會を設けて大に圖書館事業を擴張するといふことであるから、之も亦定めて數年ならずして立派な成績を擧げらるゝことであらう。圖書館界の爲めに誠に喜びに堪へぬことである。余は各地にかゝる快擧が續出せんことを衷心より希望すると仝時に、此等の壯擧は余の論旨の眞理なることを裏書するものとして喜びに堪へぬ。

去りながら我長崎縣の現狀を思ふ時余は汗顏に堪へぬものがある。縣民各位は果して如何なる感を持たるゝか。

圖書館の窓より見たる長崎近時の讀書界

增田廉吉

最近慌たゞしい思想の變遷と社會運動の勃興とにつれて人心の動搖も甚だしい我が圖書館に於ける讀書の傾向閲覽者の職業別等にもその影響を及ぼしてゐることは論を俟たないと思ふ今その一例を擧げると歐洲戰亂の直後に於て我が國の社會問題は稍過急的にその革命を叫び隨つてその研究熱の如きも稍々不自然だと思はれる程急調なものであつた。

その結果は長崎にも漸時同樣の研究熱を煽り當時圖書閲覽者の如き常に大多數を占むる學生間に此種研究者の增加したことは勿論として商工業者の數に著しい增加を來してゐる殊に官公吏中警察官吏にして此種研究者を增加したことはより多く識者の注意を惹起したものである。

常に機を見るに敏である出版業者は此の機に於て盛んに此種新研究の發表に務めた所謂窪田文三氏の現代日本と社會問題、藤原銀次郎氏の勞働問題の歸趨、豐原又雄氏の勞働紹介、伊藤正德氏の改造の戰、河上肇氏氏の社會組織と社會革命、森本厚吉氏の滅び行く階級、山川菊榮氏の婦人の勝利など云ふものはその一例であるが隨つてその種圖書の閲覽者も著しく增加を示してゐる。

斯くの如くにして長崎に於ける此種の研究は漸時その緒に就いたと云つたやうな有樣であるが未だその研究は根本問題である哲學と經濟とに充分の基礎を持つてゐなかつた隨つてその後に於ては漸時必然的に哲學、經濟の研究が勃興し特に哲學としても經濟としても實際的に社會問題のそれと密接な關係を多く有するやうなもの、研究に耽けるものが多くなつた。

同時に出版界にも問題そのものゝ研究よりも根本思想の研究に必要なる圖書の出版が弗々と現はれるやうになつたのである即ち波多野鼎氏のロシア社會學、山川均氏の歴史を創造する力、石川三四郎氏の西洋社會運動史、北上梅石民の猶太禍、酒井勝軍氏の社會の正體と猶太人など云ふ如きは同じ研究にしても稍々そのオリヂナリチーの研究途上にあるものとして別に差支ないやうに思はれる。

それと同時に一方には經濟社會學に於て、木蘇穀氏の唯物史觀研究、安倍浩氏の唯物史觀と餘剩價値、賀川豐彦氏の主觀經濟の原理など云ふが如きは正しく單なる問題としての研究以外に一歩を進めた現象として見ることが出來るこの現象は延いて文學の上にも現はれ學校教育者としての櫻井祐男氏が生を教育に求めて、社會事業家としての賀川豐彦氏が死線を越えて、書店々員としての江原小彌太氏が新約の如き又石丸梧平氏の受難の親蠶の如き確かに思想上の大革命期に伴ふ產物として取扱ふことが出來ると思はれるやうである。

斯くの如くめまぐるしい時代思想潮の唱導と研究とに多忙であつた長崎讀書界が現在どんな狀態にあるかを見ることは強ち樂屋落ばかりの興味ではあるまいと思はれる今長崎圖書館の統計の現はす所によると恰かも文藝紙上から賀川豐彦氏、江原小彌太氏、櫻井祐男等の影が薄らきかゝつたと同樣に而も時期を同じくして長崎人の社會問題に關する研究熱が冷めかゝつたやうにも思はれる。

一面から見る時には中央に於けるそれが今や研究の時期を去つて實行の時期に這入つたと同樣長崎のそれも實行

期に這入つたのだと見る人のあるかも知れないがそれは直ちにそうとも云へぬ節々がある最近中央に於て此種圖書の出版が減少したことは勿論として長崎に於ける研究熱が急激に減退したことは統計の上に爭へぬ事實である。

最近閲覧者の上に特に注意すべきは文學語學が最多數を占めてゐることは今日も昨日も圖書界の恒例として從來は宗教哲學、歴史傳記が第二位三位を占めてゐたに拘らず大正十年より頓に變じて其間に數學理學が常に第二位を占むるに到つた珍現象である。

今大正十年以降大正十三年に到る三ケ年間の統計中文學語學の閲覧者數を基調として示せば左の如くである。

大正十年	文學語學	四四、三一六	數學理學	一四、三三五	宗教哲學	一三、〇一〇	歴受傳記	一一、七八〇			
大正十一年	同	五三、三〇一	同	一五、〇三五	同	一一、七一七	同	一一、〇七三			
大正十三年	同	三、七二九	同	一、八八〇	同	九五〇	同	八六一			

この現象は單に數字が示すばかりでなく最も純心なる兒童讀物に就いて見るも顯著なるものがある同時にお伽童話其他の圖書に於ても主要材料の多くが理學に關したものゝ多くなつたことは特に注意すべきであると思ふ。

又前記同樣三ケ年に亘る閲覧者の年報數を見ると

大正十年	男	二八五、九五一	合計	二九六、七四八	
	女	一〇、七九七	前年比較	一七〇、九增	
大正十一年	男	三二一、八九八	合計	三三六、七一四	
	女	一、四八一	前年比較	一二一、六增	
大正十二年	男	三八五、八六四	合計	四〇〇、一五〇	
	女	一四、二八六	前年比較	一九二、八增	
大正十三年	男	四五〇、二〇三	合計	四六七、二五九	
	女	一七、一五六	前年比較	二二六、七增	

大正十四年十月十一月の二ケ月間に最も多く讀まれたる圖書

宗教　○佛教概論　○宗教と人生　○日本西教史　○宗教學概論

哲學　○宇宙と人生　○印度哲學研究　○大日本倫理思想發達史　○日本倫理史　○國民道德論　○日本倫理　○死と其神秘　○哲學知識　○哲學概論　○今日の常識　○現代思潮講演集

教育　○學校體操要義　○教育の革命時代　○最新各科教授資料及實際教授案　○倫理と教育　○教育學　○クレヨン畫教授の理論及實際　○教育的倫理學講義　○話方教授の新主張と實際　○胎内教育　○教育衛生　○受驗指針　○校歌ローマンス　○算術教授案

文學　○フランス童話集　○グリム童話集　○綺堂戯曲集　○江戸から東京へ　○關東七人男浪花七人男　○坂本龍馬　○天獄と地獄の間　○軍事探偵　○近藤勇　○門　○夜來の花　○紅葉全集　○不死の女王　○幽芳全集　○漱石全集　○幡隨院長兵衛　○ゲーテ全集　○現代小說全集　○大近松全集　○近代劇十篇　○潤一郎傑作集　○罪と罪　○元禄時代　○希臘神話　○イソプ物語　○世界童話大系　○現代思想文學　○子規全集　○由井正雪　○半七捕物帳　○逆境の勇士　○エマーソン論文集　○巖窟王　○愛郷記　○毒草　○八幡船　○彼岸過迄　○萬葉古義　○歐外全集　○古塔の幻　○富士　○宮本武藏の後日の仇討　○若き日のベスタロッチ　○黄色の部屋　○ある心の影

語學　○漢和大辭典　○辭林　○詳解漢和大辭典　○國文解釋法　○井上英和辭典　○井上中辭典　○井上

和英中辭典　○武信和英辭典　○英和活用辭典　○漢文解譯法　○英作文考へ方作方　○英作文の着眼點　○英文和譯法　○和文英譯法　○英文典　○英語問題答案註解　○生きた英文法　○故事熟語大辭典

歴史　○西洋歴史參考書　○國史大系　○西洋史講義　○東洋史講義　○支那文化史　○西洋歴史講義　○模範最新世界年表　○明治功臣錄　○長崎市鄕土誌

傳記　○職員錄　○幕末三俊　○高山彦九郎　○腕一本から　○江戸俠客物語

地誌紀行　○南船北馬　○上海百話　○日本より支那へ　○上海事情　○アマゾン探檢記　○マンダウキル東洋旅行記　○上海案内

政治法律　○債權總論　○債權各論　○日本債權法總論　○同上各論　○日本行政法原論　○日本刑法　○日本刑法論　○日本物權法　○現代犯罪研究　○犯罪科學の研究

經濟　○經濟原論　○國民經濟學　○リカアートの經濟原論　○人力と能力　○貧乏物語　○株式會社經濟論　○國民經濟原論　○アルサス人口論　○財政學

社會　○無產階級の世界年表　○平和問題　○社會と人生　○社會學十講　○日本風俗史　○社會學智識

數學　○代數の研究　○代數學問題解　○代數學學び方考へ方解き方　○代數學問題正解　○代數學難問題解義　○平面幾何學問題解

理學　○物理學問題解　○物理學詳解講義　○物理學講義　○系統的物理學解　○化學講義　○動物分類

○趣味の動物　○天文概說

醫學　○胃腹の新しい衞生　○簡易强健術　○記憶力增進法　○生命の神秘論　○最新運動生理學

工學工藝　○常識電氣學　○誰にも出來る電氣工學　○電氣工學　○電氣及磁器　○電氣學精義　○電氣工學通論

兵事　○砲彈を潛りて　○肉彈　○日米戰爭未來記　○日米戰爭夢物語　○戰爭論　○我等の國防へ

產業　○商業書信文範　○商業書翰文　○商業算術問題詳解　○商業作文　○商業文精義　○現代の商業及商業

音樂美術　○西洋音樂の聽き方　○西洋音樂の知識　○現代の西洋繪畫　○泰西繪畫及彫刻　○浮世風俗とやまと錦繪　○近世繪畫史　○浮世繪の諸派　○スケッチ漫畫法　○西洋美術史　○スケッチの描き方

長崎縣立長崎圖書館閲覽狀況

大正十四年　自七月　至十二月　閲覽人員表　（取扱別）

種別＼月別	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
特別	四一五	九七	二八〇	一八九	一四四	三四四	一、四六九
普通 男	六、四四二	四、一〇二	五、一六〇	四、四二三	四、〇四二	六、一九八	三〇、四六六
普通 女	六六〇	三六八	四八〇	五三九	四〇一	五三二	二、九七〇
携出 男	一〇、八五九	九、四五五	一〇、一九〇	七、九八六	六、四六〇	九、六四〇	五四、五九〇
携出 女	一、〇三二	一、一七〇	一、四〇四	一、二〇二	九六七	六三二	六、三九七

大正十四年自七月至十二月閲覧人員表（職業別）

種別＼月別	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
學生	五、九二四	四、二五九	五、一七七	四、四六六	三、九二七	六、一〇五	二六、八八六
商工業者	六三八	六〇二	五七〇	五三三	四三三	四三一	三、一一六
官公吏軍人	一、九四四	一、七三三	一、八三一	一、二六八	一、〇二六	一、四四五	九、四九九
銀行會社員	九〇八	六七〇	八六七	八〇〇	六三三	六七六	四、四四四
宗教教育家	一、二七七	一、二二	一、二四四	九一〇	七七六	一、二六七	六、四六六
記者醫師辯護士	六七八	六三九	六六七	五五五	四七〇	七五九	三、七〇八
職工	一四八	一三五	一四八	一六三	一〇四	一七三	九七一
其他	一七七三	一一八三一	一四〇六	一一六七	一〇三一	一四、三〇六	九七、八三
兒童	一、三三	一、七九〇	一、九四四	六〇八	一四七	七〇三	六、四二三
計	三〇、三六〇	二二、七六八	二六、五三五	二〇、九五〇	一七、八二七	一五、九三五	一四、三六六
閲覧一日平均人員	一、〇二二七	七六五一	九二五〇	八七二、九	九三七、七	九六〇、五	九二〇、一

大正十四年自七月至十二月閲覧圖書冊類表

種別＼月別	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
一門	五、六五六	五、八二〇	五、八九五	四、五五二	三、二五九	四、六六六	二六、七三八
二門	一〇、四九	一四、五〇一	一五、一四二	一〇、八四四	七、九〇七	一〇、四八	七〇、一九二
三門	四、八九	三、八七二	三、四二	三、三八〇	二、九七九	四、八六六	二三、七二八
四門	二、九〇二	二、五六四	二、七七二	二、四二六	二、〇九八	二、八八八	一五、五五九
五門	三、七八三	二、七六五	三、五三五	二、七七七	二、二七五	三、七二二	一八、九三七
六門	一、二六	一、〇三五	一、七三三	一、四六八	一、〇五五	一、〇九八	七、五六三

露光量違いの為重複撮影

七門	一、〇三七	八、八	一、一七三	一、〇八六	八九二	一、〇九四	六、一五九
八門	一、六六九	一、二七〇	一、三八三	一、二二三	九二八	一、五五七	七、九〇〇
九門	一三、一七九	一四、九七五	一七、三二四	二二、一〇〇	九、二〇八	二二、九〇二	七九、六七八
計	四五、〇七〇	四七、三〇〇	五一、八八八	三九、七一六	三〇、五八〇	四三、四五九	二五九、四三二
一日平均閲覧冊數	一、五〇一、三	一、六四五、六	一、八三三、七	一、六五〇、六	一、六〇九、五	一、六〇九、六	一、六四〇、二

新着和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至大正十四年九月

露光量違いの為重複撮影

七門	一、〇三七	八七八	一、一七三	一、〇八六	八九二	一、〇九四
八門	一、六六九	一、二七〇	一、三八三	一、二三	九二八	一、五七七
九門	一三、一七九	一四、九七五	一七、三一四	二一、一〇〇	九、二〇八	二一、九〇二
計	四五、〇七〇	四七、七三〇	五一、八八八	三九、七一六	三〇、五八〇	四三、四五九
一日平均閲覧冊數	一、五〇二、三	一、六四五、六	一、八二三、七	一、六五〇、六	一、六〇九、五	一、六〇九、六
						六、一五九
						七、九〇〇
						七九、六七八
						二五九、四四三
						一六四〇、二

新着和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至大正十四年九月

目次

第一門　一〇〇宗教、哲學、教育……一九
第二門　二〇〇文學、語學……二三
第三門　三〇〇歷史地誌傳記紀行案內……二七
第四門　四〇〇政治法律經濟財政社會統計……三二
第五門　五〇〇數學、理學、醫學……三五
第六門　六〇〇工學、工藝、兵事……三七
第七門　七〇〇產業、商業、交通、通信……三九
第八門　八〇〇美術、家事、諸藝、遊技、武術……四〇
第九門　九〇〇事彙、叢書、全集、隨筆、書目、雜書、新聞、雜誌……四二

新著和漢圖書目錄

自大正十四年四月
至仝　年九月

第一門、宗教、哲學、教育

書名	著者名	册數	類目	番號
淺きは深きなり	野々村眞太郎著	一	二一〇	八七
意志の自由	戸坂潤譯	一	二三五	九一
精神修養逸話の泉	高島平三郎著	一	二三四	三二四
英語試驗問題通解（大正十二年度高等學校、專門學校）	馬場吉信著	一	二三二	一四四
英語研究者の爲	伊藤勇太郎著	一	二三〇	三五七
易經乾坤		二	二三七	二三〇
家憲正鑑	北原種忠著	一	二三三	一四二
觀音とは何か	井上角三郎著	一	二一二	四三八
學習園の經營と其活用	佐藤良一郎著	一	二三一	三二六
教育教授の實際的新主張	佐々木秀一著	一	二三二	三二七
教育生理學	岩原拓著	一	二三〇	三五四
近代犯罪研究	小酒井光次著	一	二三五	九三
舊約書の文學	渡邊善太著	一	二一三	一〇六
求安錄	内杜鑑三著	一	二一三	一〇五
光明の生活（辨榮聖者遺稿要集）	田中木叉著	一	二一三	四四九
教育學十講	林博太郎著	一	二三〇	三五二
教育學十講	林博太郎著	一	二三〇	三四八
教育學紀要第一卷	土田杏村著	一	二三〇	三四三
藝術の本質	金子馬治著	一	二三〇	二二八
現代思潮大觀	同文館編輯部編	一	二三〇	二二三
現代の趨勢に對する倫理的批判	吉田靜致著	一	二三二	八四
藝術上の兒童畫教授	大竹拙三著	一	二三一	三三一
現代の哲學	高橋里美著	一	二三〇	二三七
現代哲學概論	金子筑水著	一	二三〇	二三四
現代哲學講話	村瀨哲人著	一	二三〇	二三三
現代哲學辭典	現代哲學研究會編	一	二三〇	二三二
高等小學國史解說	增澤淑著	一	二三一	三三五

書名	著者名	冊數	類目番號
公民科教授要綱解說及資料	畠山彌榮藏著	一	一三一 三三八
尋常小學國史挿畫之研究	畑中甌三著	一	一三一 三三六
文檢受驗用國民道德要領	河野清丸著	一	一三一 八三
皇室中心主義	竹由三之助著	一	一三三 一五九
皇國運動	筧克彦著	一	一三一 三一九
最善の信仰	本田日生著	一	一三一 四四八
職業指導と學校教育	櫻井香織著	一	一三一 三三四
市民教育資料	長崎市勝山尋高小學校編	一	一三一 三三二
神道の現代的研究	橋本文壽著	一	一二一 六七
宗教の發達	寺澤智了譯	一	一二〇 八九
新體育家の思想	小原正忠著	一	一三一 三三五
劣等兒低能兒心理と其教育	青木誠四郎著	一	一三〇 三五八
春秋		一	一二七 一三五
新刻頭書詩經集註	朱熹	一	一二七 一三三

書名	著者名	冊數	類目番號
書經 上下		一	一二七 一三一
詩經 天地		一	一二七 一二八
人生論十二講	江原小彌太著	一	一二〇 二三六
時間と自由意志	北昷吉著	一	一二〇 四三
口語全譯淨土三部經	江部鴨村譯	一	一二一 四五二
宗教への闘爭	藤井章著	一	一二〇 二三二
詩學(希)アリストテレス	松浦嘉一譯	一	一二〇 二二〇
思想と人格	深作安文著	一	一二〇 二二九
人格の生活	吉田靜致著	一	一二二 七九
人格の生活	吉田靜致著	一	一二二 八一
新心理學	野上援太郎著	一	一二五 九〇
兒童保護	文部省普通學務局編	一	一三〇 三六
新興藝術と新教育	志垣寛著	一	一二〇 三五三
新潮と教材の運用	中野八十八著	一	一三一 三〇八

書名	著者名	冊數	類目番號
初等數學教育根本的考察	佐藤良一郎著	一	一三一 三二四
新時代の學校教練	廣井家太著 森悦次郎著	一	一三一 三二八
文部檢定實業教員受驗指計	市川一郎著	一	一三一 三三一
析玄	廣瀬淡窓著	一	一三七 一二四
西洋哲學史	米國ジヤース著 北昷吉譯	一	一二〇 二三五
西洋哲學史	米國ジヤース著 北昷吉譯	一	一二〇 五八
聖フランチエスコの傳	八巻頴男著	一	一二三 一〇七
大正十三年度全國公立中學校高等女學校編經費ニ關スル調査		一	一三二 一四二
全國高等女學校實科高等女學校ニ關スル調査	文部普通學務局編	一	一三一 三二〇
全國公私立中學校ニ關スル諸調査	文部省普通學務局著	一	一二〇 三五一
全國特殊教育狀況	文部省編	一	一二〇 三五〇
絶對運命の精神	大山幸太郎著	一	一二〇 二三〇
西洋倫理學史	市川一郎著	一	一二二 八二
西洋文化史論十二講	朝日融淺著	一	一二〇 二二一

書名	著者名	冊數	類目番號
聖フランチエスコ	黒田正利著	一	一二三 一〇四
聖書の常識	敬醒社編	一	一二三 一〇三
世親の宗教	佐伯良謙著	一	一二三 四四一
生の實現としての佛教	高楠順次郎著	一	一二三 四四〇
體育上の病理と診斷	田邊郁著	一	一三一 三三三
靈夫直柱 上下	平田篤胤著	一	一二一 一一
大僧正天海	辻善之助著	一	一二三 四四五
體驗主義の教育	早川國吉 井上嘉七著	一	一三〇 三四七
大正十三年度全國私立中學校	文部省普通學務局編	一	一三一 三二一
ダルトン案の批判	廣瀬均著	一	一三一 三二五
條件反射論	黒田源次著	一	一二五 九二
圖畫藝術教育論	矢澤弦月著	一	一三〇 三四六
綴方教授に關する最近研究帝國教育會編		一	一三一 三三〇
哲學概論大集成	三浦藤作著	一	一二〇 二三一

書名	著者名	册數	類目	番號
東京高等師範學校第一臨時教員養成所一覽		一	一三二	一四三
系統的教育史	吉原藤川著	一	一三〇	三五九
東京外國語學校	東京外國語學校編	一	一三一	一五
東北帝國大學一覽	東北帝國大學編	一	一三二	九二
大正十三年 長崎縣教育要覽	長崎縣内務部編	一	一三〇	四五
名古屋高等工業學校一覽	名古屋高等工業學校編	一	一三一	一〇
長崎醫科大學一覽	長崎醫科大學編	一	一三二	一四〇
日本佛教史論 上下	村上專精著	二	一二二	四四七
日本周圍民族の原始宗教	鳥居龍藏著	一	一二〇	八八
日本帝國文部省第四十九年報	上下官房文書課編	一	一三〇	三
人間意識の發達	小林照朗著	一	一二四	四五〇
最新農業教授大資料	片岡重助著	一	一三一	三二九
パウロ傳	高垣勘次郎譯	一	一二三	一〇八
母の教育	三宅ヤメ子著	一	一三〇	三四九
佛教序說	高神覺昇著	一	一二二	四三七
不亡錄	望洋吟社著	一	一二二	四三九
佛陀三聖訓	常盤大定著	一	一二二	四四三
フランスの修身教授	大和貫雄譯	一	一三一	三三
佛教史林		一	一二二	四四六
東京正則文華中學講義	下川熊次郎著	一	一三〇	三五五
佛教聖典概論	深浦正文著	二	一二二	四五〇
佛陀の福音	小林鷺里著	一	一二二	四五三
米國現代の教育	廣田傳藏著	二	一三〇	三六〇
南滿洲ノ神社ト宗教	關東廳内務局學務課編	一	一二〇	九一
明治專門學校報	明治專門學校編	一	一三二	一四一
明治專門學校一覽	明治專門學校編	一	一三二	一八
禮記（一、二、三、四、）	寛政己酉	四	一二七	一一九
リップス自然哲學	八倉萬壽治譯	一	一二〇	二三五

書名	著者名	册數	類目	番號
論理學通論	須藤新吉著	一	一二二	一六
吾國體と宗教	龜谷聖馨著	一	一二〇	九〇
吾國體と基督教	加藤弘之著	一	一二三	二三

第二門　文學、語學

書名	著者名	册數	類目	番號
阿片溺愛者	デケンシー著 辻潤譯	一	二二五	九六四
愛府	泉鏡花著	一	二二五	九六二
あらたま	齋藤茂吉著	一	二二二	二三九
淺間嶽面影草紙櫻姫全傳曙草紙	柳亭種彦著 關齋北齋畫	一	二二一	二二八
泉と鐘	武者小路實篤著	一	二二五	九四五
英米新詩選	山宮允著	一	二二四	二四〇
英雄物語 英文和譯物語叢書	松浦政泰譯	一	二二四	二三九
井ルヘルム・マイステル	中島清譯	二	二二九	一〇九
優曇華物語復讐奇談安積沼	山東京傳著 北尾重政畫	一	二二一	二二八
イフイゲーニエ其他	内山眞三郎著	二	二二九	一〇九
英文小話 英文和譯物語叢書	山形五十雄譯	一	二三四	二三七
繪本更科草紙	栗杖亭鬼卵著 石田玉山畫	一	二二一	二二八
繪本金花談	速水春曉著	一	二二一	二二八
エルテルの悲み親和力	秦豐吉著 倉田潮著	一	二二九	一〇九
英米文藝印象記	日高只一著	一	二二九	一二三
英和大辭典	井上十吉著	一	二三四	一七七
阿蘭陀の花	永見鐵太郎著	一	二二六	一六五
恩讐の彼方に	菊池寛著	一	二二五	九五八
歌集憶ひ出の丘	菊池清雄著	一	二二二	二三八
王女の行衛 英文和譯物語叢書	秋元正四譯	一	二二四	二三六
櫻谷集	黑田長成著	一	二二八	一九〇
鷗外全集第十七卷	森林太郎著	一	二二〇	六八
熟語正解漢和大辭典	文明堂編輯部編	一	二二一	二五六

書名	著者名	冊數	類目	番號
可憐の少女	松浦政泰譯	一	二三四	二四二
ガリバー旅行記	松浦政泰譯	一	二二四	二四一
受驗參考漢文解釋の基礎	安藤藤四郎著	一	二二八	一九一
漢文解釋虎の卷	安達大壽計著	一	二二八	一八八
概觀英吉利文學史	大田鎭九一譯	二	二二九	一二五
彼女の運命 後編	菊池幽芳著	一	二二五	九四七
歌妓の秘密	福永渙譯	一	二二五	九三五
歌集（大虛集）	島木赤彥著	一	二二三	二三二
歌集しがらみ	中林憲吉著	一	二二三	二三四
綺堂戲曲集（一、二、五、六、七卷）	岡本綺堂著	五	二二六	一五三
泣菫詩集	藩田泣菫著	一	二二三	二四〇
戲曲作法	小山內薰著	一	二二六	一六八
奇談夢之棧	勝峯金治著	一	二二三	二二
現代戲曲全集	中村吉藏著	一	二二六	一六四
現代戲曲全集 第十卷	長田秀雄著	一	二二六	一六四
同上 第三卷	松井松翁外四名著	一	二二六	一六四
現代文問題詳解 最近十三年間高等專門學校入學試驗 東京國文學會編		一	二二一	二二六
源氏物語活釋	小林榮子著	一	二二一	二二五
源義朝	田山花袋著	一	二二五	九三四
國語解釋虎の卷 教科參考 受驗準備	安達大壽計著	一	二二一	二二七
古典劇大系 第一、七、十、十五卷		四	二二六	一六二
講談資料 祝祭日及び國民記念日	村松梢風著	一	二二五	九五七
講談資料	相島龜三郎著 宮部治郎吉著	一	二二四	九六
全國校歌、寮歌、應援歌と其の解說		一	二二二	二三六
豪膽少年 英文和譯物語叢書	松浦政泰譯	一	二二四	二三二
新譯紅樓夢	大宰衛門著	一	二二五	九三九
黑潮	德富健次郎著	一	二二五	九四二
こんこん狐	植木考之助著	一	二二四	二二七

書名	著者名	冊數	類目	番號
校訂西鶴全集 上下	熊谷千代三郎著	二	二二五	一七七
三家庭	田中友一、小幡貞治譯	一	二二五	九六二
サフォ	齊藤太郎譯	一	二二五	九五四
清水次郎長	矢田義勝著	一	二二五	九四九
秋存分、常盤の香 古俳書文庫第十篇		一	二二三	二二
支那文典	廣池千九郎著	一	二二三	一七
諸國お伽競べ 英文和譯物語叢書	松浦政泰譯	一	二二四	二三八
詩集 ゲーテ全集第一卷	獨ゲーテ著 藤森秀夫譯	一	二二九	一〇九
子規全集 第八卷	正岡子規著	一	二二〇	一〇五
淨瑠璃名作集	義太夫同好會編	一	二二六	一六六
子規全集 第一卷 第七卷 第二卷 第十一卷	正岡子規著	四	二二〇	一〇五
神典	伊ダンテー著 中山昌樹譯	一	二二六	一六一
獸人	ロンドン原著 濱林生之助譯	一	二二四	二二六
新英和大辭典	平山信譯	一	二二四	二三八
スミルノ博士の日記	ドウノセ著 島井零水譯	一	二二五	九六三
隨齋諧話	野田要吉著	一	二二三	二二
スタンダード和英大辭典	竹原常太郎著	一	二二四	二二九
世界征服	宮崎一雨著	一	二二五	九六五
西湖物語	中華飽曾麗銓著	一	二二五	九五五
世界童話大系	世界童話大系刊行會編	一	二二〇	一〇一
同上	愛イエイツ著 山宮允譯	一	同	同
世界童話研究	蘆谷重常著	一	二二〇	一〇七
創作の華	田麻比文雄著	一	二二五	九四六
讐生兒の復讐	和氣律次郎著	一	二二五	九三六
燈影	田山花袋著	一	二二五	九四八
タイース	望月百谷譯	一	二二五	九三三
大凡愚親鸞	松田青針著	一	二二五	九三八
忠直卿行狀記	菊池寬著	一	二二五	九五九

書名	著者名	冊數	類目番號
近松研究の序編	前島春三著	一	二六一六九
千代曩媛七變化物語	振鷺亭著	一	二二一二八
忠臣水滸傳浮牡丹全傳	山東京傳著 北尾重政畫	一	二二一同
蠱魚	濱林生之助譯	一	二三四二六
地上の愛	三上於菟吉著	一	二二五九四三
徒然草講話	沼波瓊音著	二	二二一二二三
校正通議 上下	賴襄著	二	二二四九五
天路歷程	パンヤン著 松東雪舟譯	一	二二五九五二
東京正則高等女學講義	下川熊次郎著	一	二三一二五七
唐陽山人詩集 上下	横川德著	一	二二八一八九
獨和兵語辭書	藤山治一著 高田善次郎著	一	二三五一
捕物時代相	白井喬二著	一	二二五九四四
長柄長者黄鳥墳刀筆青砥石文	栗杖亭鬼卵著	一	二二一二二八
日本趣味十種	國學院大學編	一	二二一二二二

書名	著者名	冊數	類目番號
日本歌謠史講話	坂井衡平著	一	二二三二二四
芭蕉翁眞跡集	栗田二三著	一	二二三二一八
芭蕉門古人眞跡集	栗田二三著	一	二二三二一七
評傳詩集バイロン	木村鷹太郎著	一	二二二二三七
ビスマルク演說集	後藤新平著	一	二二四九四
評註平賀元義歌集	尾山篤二郎著	一	二二三二四一
詩集風、光、木の葉	大木篤夫著	一	二二二二三五
筆にまかせて	芳賀矢一著	一	二二一二二〇
扶桑皇統記圖會	好華堂野亭著 柳齊重春畫	一	二二一二二八
ベラミー(美貌の友)	大宰衛門著	一	二二五九四〇
兵學大講義	白井喬二著	一	二二五九五〇
評論と隨筆	滿月會編	二	二二〇二一
平家物語圖繪	高井蘭山著 藤齊北馬畫	二	二二一二二八
北條時賴記圖繪	池田東籬著 松川孚山畫	一	二二一二二八

書名	著者名	冊數	類目番號
報恩記	芥川龍之助著	一	二二五九六〇
星月夜顯晦錄	高井蘭山著 藤齊北馬畫	一	二二一二二八
萬葉集新考	井上通泰著	二	二二三五
幻の園	ウエルソ作 濱林生之助譯	一	二三四二二四
マーデンのハウツーゲットの註解 靈感的英文和譯の研究	高橋良一著	一	二三四二三一
宮本武藏 創作講談	村松梢風著	一	二二五九五六
本居宣長稿本全集 第一、二輯	本居清造著	二	二二一一八二
創作屋根裏の二處女	吉屋信子著	一	二二五九四一
矢車草	加藤武雄著	一	二二五九三七
幽芳全集 第十三、十四、十五卷	菊池清著	三	二二〇一四四
ユース・オヴ・ライフ講義	吉田清譯	一	二二四二三〇
遊子江より野紀行	頴原退藏著	一	二二三一二二
謠曲辭典	蜂谷時順著	一	二二三一一六
驢馬物語 英文和譯物語叢書	山縣五十雄譯	一	二二四二三五

書名	著者名	冊數	類目番號
吾等は如何に生くべきか	英ウイリアム、モーリス著 本間久雄譯	一	二二〇一二三
吾輩は猿である	松浦政泰譯	一	二二三二三三
文學に現はれたる我が國民思想の研究 平民文學の時代上 貴族文學の時代	津田左右吉著	二	二二〇一二三
和英大辭典	武信由太郎著	一	二二三四二三三
われが生活より	ゲーテ全集第八卷 生田長江譯	一	二二九一〇九

第三門　歷史、地誌、傳記、紀行

書名	著者名	冊數	類目番號
亞細亞研究 第二號 第三號	大坂東洋學會編	二	三三三四七
維新土佐勤王史	瑞山會編	一	三二六二三〇
一字庵菊舍尼遺稿	本庄能太郎著	一	三三一三六四
奄美大島史	坂口鎌太郎著	一	三二六二二九
燕吳戴筆	那波利貞著	一	三三五一七四

書名	著者名	冊數	類目番號
歐米を縱横に	佐竹義文著	一	三三五 一八〇
歐米の旅より	守屋榮夫著	一	三三五 一七八
大鳥圭介傳	山崎有信著	一	三三一 三六二
大倉鶴彦翁	鶴友會編	一	三三一 三五九
樺太廳治一班	樺太廳編	一	三三三 三五
樺太廳治要覽 第四回	樺太廳編	一	三三三 二六
咸北雜俎	川口卯橘著	一	三二七 二四
ガンヂー論	福永渙譯	一	三三三 二四
欽定大清會典事例	皇岡外百九八名編光緒戊申	一五〇	三二八 八一
欽定大清會典	皇岡外百九八名編光緒戊申	一〇	三二八 八〇
九朝東華錄 自卷八至卷九欠本	王先謙敬著	一〇	三二八 四九
欽定續文獻通考	幣瑣外百十七人編光緒二十七	四〇	三二八 四七
欽定續通典	幣瑣外百十七人編光緒二十七	一八	三二八 四四
欽定續通志	幣瑣外百十七人編光緒二十七	六〇	三二八 四二
希臘羅馬神話（傳說ノ時代）	野上彌生子著	一	三二九 二〇
近世日本國民史	德富猪一郎著	一	三二四 三四
熊狩の旅	德川義親著	一	三三五 一七九
歡樂の支那	後藤朝太郎著	一	三三五 一七六
關東廳要覽（大正十四年）	關東廳長官房文書課編	一	三三三 四二
觀樹將軍縱横斷	能田宗次郎著	一	三三三 二六
皇朝續文獻通考	沈家本外數名編光緒乙巳冬	八八	三二八 四八
同 上	幣瑣外十百六人編光緒二十七年	五二	三二八 四六
皇朝通典	幣瑣外百十六人編光緒二十七	二	三二八 四三
皇朝通志	幣瑣外百十六人編光緒二十七	一六	三二八 四一
皇朝掌故彙編	鄒張壽鏞外四名編光緒壬寅	七二	三二八 三五
康熙大帝	西本白川著	一	三二八 七九
航米記 第二、三篇		二	三三五 一七五
國史大辭典（あ…を）	八代國治著	一	三二一 一七四

書名	著者名	冊數	類目番號
皇太子殿下海外御巡遊日誌	宮內大臣官房庶務課編	一	三三五 一七〇
小松原英太郎君事畧	阪谷芳郎著	一	三二一 三五八
昨夢錄	平山成信著	一	三三五 一七七
在長沙帝國領事館管轄區域內事情	外務省通商局編	一	三三四 九七
改造後の最新世界地理集	角田政治著	一	三三〇 三二
箋注蒙求 中下		二	三三二 七五
佐世保發達史	北島榮助著	一	三二六 二二五
最新世界地理集成	角田政治著	一	三三一 一二三
史學會論叢 第一輯	史學會編	一	三二〇 三五
十朝聖訓		一〇〇	三二八 三九
人文地理學解說（重要問題）	工藤暢須著	一	三三一 一二七
成吉思汗ハ源義經也	小谷部全一郎著	一	三三三 二五
職員錄	印刷局編	一	三三一 二七
四十七義士（上卷）	林新著	一	三二六 二二七
諏訪史	居鳥龍藏著	一	三二六 二三一
世界產業地理要論	左海猪平著	一	三三〇 三四
參考世界地理講義	西田卯八著	一	三三〇 三三
先哲叢談	原善公通著	一	三二一 三六五
小方壺齋輿地叢鈔	南清河王光緒辛卯	一	三二八 四五
西洋歷史講義	朝日融淺著	一	三二九 四八
大日本古文書	東京帝國大學編	一	三二六 一一
東洋史	寺島圭三著	一	三二八 三四
大日本帝國地理精義	小林房太郎著	一	三三一 一二六
大正十四年朝鮮要覽	朝鮮總督府編	一	三三一 三三
中外通商始末記	薈道人編光緒乙朱仲夏	六	三二八 四〇
朝鮮史話	幣原坦著	一	三二七 二三
地理書解說	富士鑄二郎著	一	三三〇 三一
調査彙報 第十三、十四 第十五號	朝鮮總督府庶務課編	三	三三二 三一

書名	著者名	冊數	類目番號
塚原夢舟翁	塚原周造氏海事關係五十年記念祝賀會委員編	一	三三二 三六三
鄭氏通志	鄭樵漁沖撰光緒二十七	一	三二八 三七
鐵道旅行案内	鐵道省編	一	三三六 六〇
東洋讀史地圖	箭内亙著	一	三二八 八三
東洋史精義	西村爲之助著	一	三二八 八二
東洋歷史參考圖譜 自第一輯至第四輯	東洋歷史參考圖譜刊行會編	二	三二八 五〇
東華錄	同光緒十有三年秋 同	二八	四九
東華續錄	王先謙	七六	三二八 四九
杜氏通典	李翰撰 光緒二十七	一八	三二八 三六
德川幕府上期 近世日本國氏史	鶴富猪一郎著	一	三二四 三四
長崎	原郊月著	一	三三六 九九
南船北馬	森永太一郎著	一	三三五 一八一
長崎市職員錄	長崎市役所編	一	三三一 三六六
ナポレオン時代史	箕作元八著	一	三二九 四九

書名	著者名	冊數	類目番號
長崎現勢要覽	長崎市役所編	一	三三四 一二四
長崎縣勢要覽	長崎縣編	二	三三一 一〇
日本訪、關東 地理文庫	北垣泰次郎著	一	三三一 一一八
日本外史 嘉永元年戊申	頼山陽著	一	三二一 一七三
日本外史講義 自卷ノ一至卷ノ四	興文社編	四	三二一 一七一
日本史講話	萩野由之著	一	三二一 一七〇
二千五百年史	竹越與三郎著	一	三二一 五一
日本外史辯妄	法貴發編	一	三二一 三七
日本より支那へ	後藤朝太郎著	一	三三四 九四
日支鮮人百年の長計たるべき滿蒙發開策	石井福次著	一	三三三 四五
日本地圖帖	小川琢治著	一	三三一 一一六
馬氏文獻通考 馬端臨貴與光緒二十七		一	三二八 三八
美名錄 卷一	弘化巳	一	三二六 二三八
平原 (滿鮮紀行號)	平野博三著	一	三三五 一七一

書名	著者名	冊數	類目番號
米國通信	秋永壽一著	一	三三五 一七二
本朝官職備考	三宅帶刀著	一	三二一 一七三
マグダレナ・ソフイアバラ傳 聖女心學院編		一	三三三 七二
滿鮮の行樂	田山鉞彌著	一	三三五 一六九
前橋市案内	前橋市役所編	一	三三六 九八
南滿洲鐵道旅行案内	南滿洲鐵道株式會社編	一	三三六 九六
明治文化發祥記念誌	大日本文明協會編	一	三二五 一四
山縣元帥	杉山茂丸著	一	三三二 三六一
由利公正傳	三岡丈夫著	一	三三二 三六〇
横濱古圖錦繪展覽	横濱市圖書館編	一	三二六 二二八
蘭領東印度事情	外務省通商局編	一	三三四 九六

第四門 政治、法律、經濟及財政、社會統計

書名	著者名	冊數	類目番號
英國殖民發展史	永井柳太郎譯 英、エチ井エチ アント著	一	四五一 一五
歐洲の現勢と其の將來	永富守之助著	一	四一〇 一三一
吾人の開拓すべき海外有望の富源	山田佐太郎著	二	四五一 一八
金は金を生む	吉川長之助著	一	四五四 三九
階級問題 現代社會問題研究 第二十卷	日本社會學院調査部編	一	四五二 六七
海外各地在留本邦人職業別人口表	外務省通商局編	一	四三一 一〇
海商法	松本丞治著	一	四二三 六〇
簡易保險局統計年報	簡易保險局編	一	四七一 二九
關東地方震災救援誌	大阪府編	一	四五三 二二
官報 自大正十四年三月一日至大正十四年三月三十一日	内閣印刷局編	一	四一〇 五〇
机上辯護士	中澤陽堂編	一	四二〇 一八六
金融六十年史	東洋經濟新報社編	一	四三〇 一六三
勤儉奬勵に關する計畫要綱	長崎縣編	一	四五四 三六
貨幣論 經濟學說大系七	安倍浩著	一	四三〇 一三八

書名	著者名	册數	類目	番號
外務省公表集 第五輯	外務省編	一	四一三	八六
KKK	杉本義郎譯	一	四五〇	一九五
憲法撮要	美濃部達吉著	一	四一一	三三
經濟的新教師論	立山藤松著	一	四五四	四二
現代社會問題研究	日本社會學院調査部編	一	四五二	六七
現代社會文明 現代社會問題第一卷	建部遯吾著	一	四五二	六七
研究館彙報五卷五號六卷一號	崎高商編	二	四三〇	二九
刑事訴訟法	牧野英一著	一	四二四	三
經濟思想及制度	田崎仁義著	一	四三〇	一六一
經濟科學十二講	赤松克麿著	一	四三〇	一六二
國策私見 前篇後篇合卷	足立陽太郎著	一	四五一	一七
是れでも世界平和か	石丸藤太著	一	四二一	一〇五
債權法概論	岩田新著	一	四二一	七六
債權總論	横田秀雄著	一	四二一	五五

書名	著者名	册數	類目	番號
債權各論	横田秀雄著	一	四二一	一
日本親族法要論	柳川勝三著	一	四二一	七五
第一回上海經濟年鑑	上海毎日新聞社編	一	四七一	四八
執務能率講話	神長倉眞民著	一	四五四	四〇
常平倉の研究 經濟史研究叢書第一册	本庄榮次郎著	一	四三〇	一六七
商行爲法論	水口吉藏著	一	四二三	四一
新策 二、三、四、	頼襄著	一	四一〇	一三二
支那古代經濟思想及制度	田崎仁義著	一	四三〇	一六五
殖民地便覽	内閣殖拓局編	一	四三一	三七
社會學	景山哲雄著	一	四五〇	一九六
純正社會學	石川功譯	一	四五〇	一九九
社會政策論	高島素之 安部浩譯	一	四五一	一四
世界革命之裏面	包荒子著	一	四五〇	二〇一
世界經濟史概論（シュミット）	川西正鑑著	一	四三〇	一六八

書名	著者名	册數	類目	番號
絶交問題	荒牧藤三著	一	四一三	八七
成功せる農村振興策	折目六右衛門著	一	四一三	一〇九
註解訴訟記錄 第一審手續	齋藤常三郎著	一	四二四	二二
綜合經濟論	佐野學譯	一	四五〇	一五五
租稅論	安部浩著	一	四四一	二〇
臺灣蕃族習慣研究	臺灣總督府調査會編	八	四六〇	一九
第六回國際勞働總會報告書	外務省編	一	四一三	七六
第五十回帝國議會貴族院議事速記錄	内閣印刷局編	一	四一一	五〇
第五十回帝國議會衆議院議事速記錄	内閣印刷局編	一	四一一	五〇
大日本帝國港灣統計	内務省土木局編	一	四七一	三〇
中世寺院法と經濟思想	山口正太郎著	一	四三〇	一六九
人口論	高島素之 安部浩譯	一	四五一	一四
貯金の出來る安心生活	天笠公平著	一	四三一	四一
土に還る	室伏高信著	一	四五〇	一九七

書名	著者名	册數	類目	番號
電車ストライキ	桑田次郎著	一	四五二	一〇六
朝鮮總督府施政年報 大正十二年度	朝鮮總督府編	一	四一三	一〇八
田園の文化	淺井榮次郎著	一	四二三	一〇七
鐵道省鐵道統計資料	鐵道省編	一	四七一	四一
都市計畫と公園	上原敬二著	一	四二三	一〇六
特別民事訴訟論	松岡美正著	一	四二四	二三
長崎市產業統計	長崎市役所編	一	四七一	四九
長崎縣米麥統計 大正十三年	長崎縣編	一	四七一	四六
長崎縣水產統計 大正十二年	長崎縣内務地方課編	一	四七一	三七
長崎縣統計書 自第一篇至第四篇 大正十一年	長崎縣編	一	四七一	二
長崎市社會事業要覽	長崎市役所社會課編	一	四五一	一六
長崎縣公報	長崎縣編	一	四二一	五〇
日本帝國統計年鑑	内閣統計局編	一	四七一	六二
日本債權法各論 增訂	鳩山秀夫著	一	四二一	七四

書名	著者名	冊數	類目	番號
日本勞働運動發達史	赤松克麿著	一	四五〇	二〇二
日本法制史	池邊義象著	一	四二〇	五一
日本資本主義經濟の研究	高橋龜吉著	一	四三〇	一六六
農村法律問題	末松嚴太郎著	一	四二〇	一八五
能率增進通俗圖解 能律增進と人の成功	近藤留藏著	一	四五四	三八
農村問題 現代社會問題研究第五卷	日本社會學院調査部編	一	四五二	六七
日本農民騷動史	木村靖二著	一	四五〇	二〇〇
番族慣習調査報告書 自第二卷至第五卷 臨時臺灣舊慣調査會編		四	四六〇	一九
貧窮 現代社會問題研究第二卷	杵澤義房	一	四五二	六七
文藝年鑑	日本年鑑協會編	一	四七〇	八
文化生活 科學を基礎とした	枝元長夫著	一	四五四	四一
改版增補物權法	横田秀夫著	一	四二一	五六
婦人運動	原田實著	一	四五二	一〇五
普選と勞働階級	江木衷著	一	四二一	三二

書名	著者名	冊數	類目	番號
普選案と歐米の近代道德	江木衷著	一	四二一	三二
平和題問	建部遯吾 山内雄太郎著	一	四五二	一〇七
同		一	四五〇	二〇〇
保險法	松本丞治著	一	四二二	四二
法制講話	森莊三郎著	一	四二〇	一八七
マルサス人口理論	佐久間原著	一	四五〇	二〇二
民事訴訟法論	早川彌三郎著	一	四二四	二一
無產階級の世界史 社會問題叢書第四篇	上田茂樹著	一	四五〇	二〇三
模範手形法講話	平尾廉平著	一	四二三	四〇
改訂增補旅費法規の研究	濱垣恒著	一	四二七	一五
露國共產黨第十二回大會決議 (勞農露國調査資料第三十五篇)	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇
露國工業的經濟に關する指導的意見 勞農露國調査資料第二十五篇	南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課編	一	四五〇	一八〇

書名	著者名	冊數	類目	番號
勞農露國の言論機關 上卷 勞農露國調査資料廿九篇 下卷 廿篇 南滿洲鐵道株式會社編		一	四五〇	一八〇
露國の工場委員會 勞農露國調査資料第二十八篇	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇
勞働と法總論	孫田秀春著	一	四二七	一四
勞農國家と教會	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇
唯物史觀の改造	高島素之譯	一	四五〇	一九八
霧國の各聯盟共和國概要	南滿洲鐵道株式會社編	一	四五〇	一八〇
露國の自治共和國及自治論	同右編	一	同	同
露國工業法概要	同右編	一	同	同

第五門　數學、理學、醫學

書名	著者名	冊數	類目	號番
榮養研究彙報	榮養研究所編	一	五三六	一三六
家庭生物學	小内繁雄著	一	五二七	七二
紀州魚譜	宇井縫藏著	一	五二五	五〇
氣象要覽	中央氣象臺編	一	五二四	二三
幾何學の根抵	中島秀次郎著	一	五一三	二三
幾何學、解き方詳解	清水清著	一	五一二	二三
近代科學二十三講	大沼十太郎著	一	五二〇	八〇
氣象雜纂	中央氣象臺編	一	五二四	四六
理論計算化學解釋法	林鄰著	一	五二三	四五
受驗參考化學要點の研究	東長藏著	一	五二三	四四
化學の講義と問題の正しき解き方	藤木源吉著	一	五二三	四一
結核征服	茂野吉之助著	一	五三七	一四〇
系統式化學解	山下祥輔著	一	五二三	四三
同		一	五二一	五〇
教育生理學	岩原拓著	一	五三一	一六
子供を强くする爲めに	三田谷啓著	一	五三七	一四一

書名	著者名	冊數	類目番號
考古圖集 第三十二、三十三、三十四集		一	五二八 三三
考古圖集 自第二期一集至第七集		一	五二八 三三
考古精說 第八集	八木奘三郎著	一	五二八 三二
昆虫記	椎名其二著	一	五二五 四七
最新遺傳論	丘淺次郎著	一	五三一 一六
數學叢書第十一編 算術四則問題	林鶴太郎著	一	五一〇 五九
最新の治療智識	山田豐著	一	五三八 四四
進化と思想	松平松年著	一	五二七 七五
進化學說 佛、ドラージュゴールド、スミス著	小泉丹譯	一	五二七 七四
自然地理學概論	石原初太郎著	一	五二〇 八二
社會學的認識論	宮崎市八著	一	五二〇 八三
新力學	佐野榮治著	一	五二一 四八
趣味の動物界	伊藤隼著	一	五二五 四六
植物名鑑（圖解）	東京博物學研究會編	一	五二六 四七

書名	著者名	冊數	類目番號
人生動物學	中澤毅一著	一	五二七 七二
人類物語	神近市子譯	一	五二八 二四
人類及地球の運命	石井重美著	一	五二八 二七
診療寶典	山田豐著	一	五三二 三
食物化學	澤村眞著	一	五三七 一三七
生物地學講話	横山又次郎著	一	五二七 七六
世界の反響	横山又次郎著	一	五二〇 八八
科學智識 世界の驚異	松平道夫著	一	五二〇 八五
初等幾何學 第一卷	小倉金之助譯	一	五一三 二一
小學算術の解き方覺え方	管隼人著	一	五二一 四六
星座の圖	古川龍城著	一	五二三 五四
遺傳研究 生命の科學	森田松榮譯	一	五二七 七〇
代數模擬試驗	南光社編輯部編	二	五三 二六
最新式代數學問題集	岡田剛著	一	五三 二五

書名	著者名	冊數	類目番號
全國諸官立學校 代數模擬試驗	南光社編	一	五二 二六
代數の研究 上卷	永野末治著	一	五二 二三
大正震災美績	東京府編	一	五二四 四五
最新地文地理集成	高橋純一著	一	五二四 四七
地理學通論 地文學の部	三村信男著	一	五二〇 二四
通論考古學	濱田耕作著	一	五二八 二九
動物の分類と實驗 現代動物叢書第一卷	島山久重著	二	五二五 四九
東京府大震災誌	東京府編	一	五二四 四八
統計年報 自大正十一年一月至大正十二年十一月 第一區府縣立、金生病院編		一	五三〇 四四
日本考古學	中澤澄男著	一	五二八 三二
燃料、試驗法及石炭購買法	若林金五郎著	一	五二三 四二
ビタミン	藤卷眞知著	一	五三七 一三八
地球革命の話 氷河時代	マツケイ著 藤田一枝譯	一	五二八 三〇
最近物理學受驗の研究	竹內潔著	一	五二一 五一

書名	著者名	冊數	類目番號
受驗參考 物理學要點の研究	東辰藏著	一	五二一 四九
文明起源物語	相馬由也譯	一	五二八 二五
文化人類學	西村眞次著	一	五二八 二六
本邦氣候表	中央氣象臺編	一	五二四 四四
水を飲むべし	大阪毎日新聞サンデー毎日編	一	五三七 一三九
毛詩品物圖改	岡公翼著	一	五二〇 八六
兩性問題と生物學	木村鎰藏著	一	五二七 七三
理化年表	東京天文臺編	一	五二〇 八一
體驗に立脚したる 理化新實驗法精說	長澤米次郎著	一	五二〇 八七
有史以前の跡を尋ねて	烏井龍藏著	一	五二八 二八

第六門　工學、工藝、兵事

書名	著者名	冊數	類目番號
大阪工業試驗所報告	大阪工業試驗所編	一	六二〇 五
同第五回第一三號	大阪工業試驗所編	一	六二〇 五

書名	著者名	册數	類目	番號
海上の勝利	米ダフルユーエスシムス著 石丸藤太譯	一	六三二	二六
紙漉重寶記	堀越壽助著	一	六三三	七八
學界時報 第二卷	電氣學界編	一	六一四	五三
現代小學校の建築と設備	峰彌太郎著	一	六二二	四二
建築衛生工學	大澤一郎 櫻井省吾著	一	六二三	四一
航用測器學	井關貫著	一	六一六	五
航用測器學附圖	井關貫著	一	同	同
最新鑛業智識	齋藤太吉著	一	六一五	一五
照明工學 (改訂)	建築書院編	一	六一四	五三
耐震耐火家屋構造	大竹巽著	一	六二三	四〇
築港	廣井勇著	一	六二一	一〇
電子及原子論大要	水野敏之丞著	一	六一四	七一
電氣機械試驗法	小澤省吾著	一	六一四	六八
ディーゼル、エンジン	淺川檍八著	一	六一三	四八

書名	著者名	册數	類目	番號
電氣學精義	關口定伸著	一	六一四	五四
獨佛戰史 千八百七十年 千八百七十一年	附圖共參謀本部編	二	六三〇	二三〇
最新實用塗裝工業並塗料製造法	藤崎喜代太著	一	六二二	七九
土木試驗所彙報	内務省土木試驗所編	一	六二一	二一
東京工業試驗所報告	東京工業試驗所編	一	六二〇	一
陶磁器試驗所報告	陶磁器試驗所編	一	六二二	七五
日露戰史 自第一卷至第十卷各付圖付	參謀本部編	一	六三〇	六九
日本陶瓷史	今泉雄次 小森彦次著	一	六二〇	一六
日本古建築菁華	岩井武俊著	一	六一二	三八
ばんざい		一	六三〇	二三九
放送無線電話	中上豐吉著	一	六一四	七〇
無線電話の話 (實用)	中川昌雄著	一	六一四	六九
露土戰史 (附圖共) 千八百七十七年 千八百四十八年	參謀本部編	六	六三〇	二三一
我が家の煖房	柳町政之助著	一	六一二	三九

第七門　産業、商業、交通及通信

書名	著者名	册數	類目	番號
新しい草花の作り方	堀切參郎著	一	七三一	二八
一萬圓儲ける迄	實業の日本社編	一	七五〇	一三三
温室園藝の智識	石井勇義著	一	七二〇	二
フアアブル家畜の歴史	佛、アンリイフアアブル 安成二郎著	一	七四二	四
港灣と鐵道との關係調査	鐵道省運輸局編	一	七六一	三六
外國爲替相場の見方	野田澤軍治著	一	七五三	一七
必ず評判をとる新らしい商店の經營と顧客の待遇法と販賣術	清水正巳著	一	七五〇	一三二
廣告文化	黒崎雅雄著	一	七五一	一〇
小鳥の飼ひ方	佐伯大太郎著	一	七三二	二九
國家の急務たる小運送の改善について	中野金次郎著	一	七六三	一五
最近の歐米商業會議所	商業會議所聯合會編	一	七五〇	一三〇
最近簿記問題詳解	寶文館編輯所編	一	七五四	二
支那の金塊投機と銀相場	井村薰雄著	一	七六三	一八

書名	著者名	册數	類目	番號
商學通論	武田英一著	一	七六〇	九
商用文精義 (最新)	服部嘉香著	一	七五五	七
趣味の郵便切手	三井高陽著	一	七六一	三三
自由貿易及保護關稅論	高島素之 安部浩譯	一	七五二	四四
實驗果樹剪定法	恩田鐵彌著	二	七二一	五七
水產學綱要	杉浦保吉著	一	七四一	三三
世界の自由港制度	野波靜雄著	一	七六二	一五
全國文具界大觀 (大正十三年度)	坂本胖著	一	七五〇	一三五
商業算術問題詳解	寶文館編輯部編	一	七五五	六
商業と經濟	長崎高商研究館編	一	七六〇	一〇三
臺灣貿易要覽 大正十一年度	臺灣總督府稅關編	一	七五二	四五
茶業試驗報告	農商務省茶業試驗場編	一	七三三	六
畜產事例 農業經營ヲ有利ナラシメタル	米津政賢著	一	七一〇	九〇
重要商品學講義	水口音三郎著	一	七六二	一四

書名	著者名	册數	類目	番號
大正十二年度 通信統計要覽	遞信省通信局編	一	七七一	二
大正十一年度 鐵道輸送主要貨物數量	鐵道省運輸局編	一	七六三	一七
朝鮮人の商業	朝鮮總督府編	一	七五〇	一三四
大正十年度 鐵道統計資料	鐵道省編	一	七六三	一〇
大正十一年 鐵道省年報	鐵道省編	一	七六一	二八
大正十四年三月 土地利用及開墾事業要覽（第六次）	農商務局編	一	七三一	二八
名古屋市觀業要覽（第九回）	名古屋市役所編	一	七〇〇	四八
日本製品圖說	高鋭一著	三	七〇〇	五〇
府爲替信用狀論	伊東和雄著	一	七五〇	一三二
日本綿布の世界的地位	山本顧彌太著	一	七五二	四三
日本全國鐵道線路圖	鐵道省編	一	七六一	一四
日本全國鐵道線路哩程	鐵道省編	一	七六一	三五
農商務省第十一回工藝展覽會圖錄	農商務省編	一	七〇〇	四九

書名	著者名	册數	類目	番號
農業經濟學	横井時敬著	一	七二四	二九
趣味と實用 鴿の飼ひ方	武知彦榮著	一	七四二	三
應用自在 肥料配合法	鈴木千代吉著	一	七二一	六〇
最新肥料學講義	吉村清尚著	一	七二一	五九
肥料的麥作改良法	鈴木千代吉著	一	七二〇	一
メートル法度量衡教授の實際	初等教育研究會編	二	七五七	一九
木炭ニ關スル經濟調査	鐵道省運輸局編	一	七五四	二九
林業試驗彙報十六號	農商務省林業試驗場編	一	七四一	七
最新林業の經營	上原敬二著	一	七三〇	一
米國ニ於ケル荷物ノ近距離運送	鐵道省運輸局編	一	七六三	一六

第八門　美術、家事、諸藝及遊技、武術

書名	著者名	册數	類目	番號
雲烟略傳（藝苑叢書）	相見繁一 清宮秀堅著	一	八一〇	一三
繪葉書帖	春耕者峻巖著	一	八一〇	一三
繪葉書	前田香雪著	四	八一〇	一三
江戸諸家人名錄（藝苑叢書）	扇面亭著	二	八一〇	一三
音樂の世界は廻る	レオポルト、アウエル著 馬場二郎譯	一	八三一	三四
オリムピアの印象	野口源三郎著	一	八三〇	一四
歐舞伎興業略年表	日比谷圖書館編	一	八三二	二八
歌劇大觀	大田黑元雄著	一	八三二	二七
寒梨璃綴 上中下（藝苑叢書）	淺野長祚著	三	八一〇	一三三
學翼（藝苑叢書）	大江資衡著 圓山應擧校著	一	八一〇	一三三
畫乘要畧（藝苑叢書）	白井華陽著	一	八一〇	一三三
歌舞伎と近代劇概論	伊東鶴松著	一	八三二	二六
現代の日本畫	松本亦太郎著	一	八一一	一五一
現代の西洋繪畫	岡島狂花著	一	八一一	二
毛糸編物圖解	久保田義雄著	一	八三二	三三
口嗜小史（藝苑叢書）	春耕者峻巖著	一	八一〇	一三三
後素談叢（藝苑叢書）	前田香雪著	四	八一〇	一三三
今古紋樣集		一	八一五	三二
茶席黑寶祖傳考	藤井以正著	一	八一〇	一三三
裁縫おさいくもの 上	伊藤學外二名著	一	八三二	三四
品川灣の投網	桐島像一著	一	八三八	一九
小蘋畫譜	野口親筆著	一	八一一	一五一
十二刀法詳說（藝苑叢書）	楳山二郎公忠著	一	八一〇	一三三
松陰快談（藝苑叢書）	長野豐山著	一	八一〇	一三三
新裁縫學習法	木下竹治著	一	八三二	三二
スケッチ漫畫自在	服部亮英著	一	八一一	一五六
睡菴清秘錄	浦上春琴錄	一	八一〇	一三三
水彩畫の新學習	横井曹著	一	八一一	一四九
西洋音樂のきゝ方	小松耕輔著	一	八三一	三三

書名	著者名	冊數	類目	番號
小蘋書譜	野口親華	四	八二一	一五二
石亭書談（藝苑叢書）	石亭竹本與著	一	八一〇	一二三
西洋美術史	佛、サロモン、ヴイナツク著 河野譲譯	一	八一〇	一二〇
たまつき術	小和田嘉一著	一	八三六	四
代表作集成 佛國及支那美術展覽	小崎都也野著	一	八二一	一五〇
テニス（日本體育叢書第十四編）	太田芳郎著	一	八三〇	一五
手縫で出來る子供洋服	三須裕著	一	八三三	三五
浪華人物誌（藝苑叢書）	岡本撫山著	一	八一〇	一二三
日本美術年契	福地復一著	一	八一〇	一二三
ニール河の草	木村莊八著	一	八一〇	一二七
日本音樂の聽き方	那智俊宣著	一	八三〇	一三
版畫禮讃	山田清作著	一	八一四	六九
美術年鑑	美術年鑑編輯所編	一	八一〇	一二八
扶桑名公畫譜（藝苑叢書）	淺井不奮著	一	八一〇	一二三
ペン習字の意義及び練習法教授法	黒柳勳著	一	八一二	四〇
ベートヴエンの第九ジユンフオニー	田村寳貞著	一	八三一	三一
本朝畫人傳補遺	西村兼文著	一	八一〇	一二三
未來派研究	神原泰著	一	八一〇	三一
ミケルアンジエロ及ミレー	ロマン、ローラン著 木村莊八譯	一	八一〇	一一九
明治以前洋畫類集	後藤博山著	一	八一一	一五三
遊戯競技の實際	可兒鑄著	一	八三六	三
洋樂夜話	大田黒元雄著	一	八三一	三三
良山堂茶話（藝苑叢書）	阿部真山著	一	八一〇	一三三

第九門　事彙、叢書、隨筆、書目、雜書　新聞、雜誌

書名	著者名	冊數	類目	番號
大增補改版 新しい言葉の字引	服部嘉香 植原路郎譯	一	九一〇	三〇
新しい發明及發見	秦澤義人著	一	九五〇	五〇
一官吏の生活から	戸水昇著	一	九三〇	四七
柯公全集	大庭景秋著	二	九一〇	四九
近代科學の諸問題	大日本文明協會著	一	九二〇	三九
歡喜	後藤靜香著	一	九五〇	五三
熊本縣立圖書館和漢圖書分類目錄 熊本縣立圖書館編		一	九四〇	八二
教育と御伽の參考古書目錄	青木平七著	一	九四〇	八一
京都圖書館和漢圖書分類目錄（文學語學之部）		一	九四〇	四
同　上（社會産業之部）		一	九四〇	四
古今要覽稿	圖書刊行會編	一	九一〇	九
今日の常識	中下岳 岡成志著	一	九一〇	二八
鄕土志料目錄	鹿兒島縣立圖書館編	一	九四〇	七五
子供の疑問はどうとくか	近藤新一著	一	九五〇	五一
國際事情	外務省情報告	一	九七〇	二四
使命と人生	後藤靜香著	一	九五〇	五二
聚團心理	英ウイリヤム、マクドガル著 宮澤末男譯	一	九二〇	三九
失業經濟	大日本文明協會編	一	九二〇	四
實用家庭科學	山本正三著	一	九一〇	三一
新思想の解剖 上 下	高木八太郎著	一	九一〇	二九
史學雜誌		一	九七〇	一六
週刊朝日 自大正十二年七月至大正十三年七月	大阪朝日新聞社	一	九六〇	二三
生命の舞踏	岡部龜次郎譯	一	九二〇	四
政局は斯くして動く	大日本文明協會編	一	九二〇	三九
その日その日の物語	加藤末吉著	一	九五〇	五六
煙草禮讃	下田將美著	一	九三〇	四八
教育資料 智識の庫	藤本敏郎著	一	九五〇	五五
千葉縣立圖書館和漢圖書分類目錄	イ、ハンケイン トン著 武者金吉譯	一	九一〇	四八
地球と太陽		一	九二〇	四
東京市立圖書館增加圖書目錄		二	九四〇	五八

書名	著者名	冊數	類目	番號
東亞同文書院圖書目錄	第一、二輯 東亞同文書院編	二	九四〇	七二
日米國際紀要	大日本文明協會編	一	九二〇	三九
廣島高等師範學校和漢書分類目錄		一	九四〇	八三
比例代表制度論	大日本文明協會編	一	九二〇	四四
彌動出世以前	近重眞澄著	一	九五〇	五四
明治文化の紀念と其批判	大日本文明協會編	一	九七〇	一三三
吾が日吾が夢	イ、カーペンター著 宮島新三郎譯	一	九二〇	四

終